

ことばの獲得初期における音楽的表現（5）

—音楽刺激に対する身体表現—

○細田淳子(東京家政大学) 小野明美(東京家政大学ナースリールーム)

1. はじめに

乳児における言葉の獲得研究に比べ、音楽的な表現研究や歌の獲得研究は非常に少ない。そこで我々は、歌の獲得に関する音楽的表現の様子を明らかにしたいと考えている。第53回大会の研究発表では乳児のうたい始めに着目した。(1)

うたい始めのことを理解するためには、生後からうたい始めるまでの間の様子をより詳しく観察する必要がある。そこには、歌になる前の音声による表現ばかりではなく、その他の身体による表現や表情や行動のすべてが総合的に含まれているからである。そこで第54回大会では、ことばも歌も出始める前から身体で音楽に反応している乳児の自由な表現に視点をあてた。本論は一連の研究の第5回である。

2. 研究の目的

乳児が、音楽的な刺激に対して喜んで手足を動かす、などの反応をすることはよく知られている。しかしながら、どのくらいの発達段階で身体の中のどの部位を使ってどのような表現をしているのか、またその表現の現れに順序性はあるのか、といった詳しい研究はあまり見かけない。そこで今回は、そのような表現を保育施設の日常の中から拾い出し、詳細を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

これまでと同様に東京家政大学ナースリールームでの観察録画及び、日誌、保育者からの聞き取り調査、を中心に考察する。実験的にうたって聞かせたり、CDをかけたりということは行わずに、日常の保育の中から、丹念に子どもの表現を拾う。対象児は0歳から1歳児クラスの6人。(詳細は別紙)

4. 動きの表現

音楽的な刺激に対して子どもは、個々の発達段階で、身体のできることを全て使って表現している。

これらの表現を継続して観察していると、子どもによって好きな動き、得意な揺れ方といった「個性」とでも呼ぶべきものがあるようだ。

身体を上下や左右に揺らすのは、音楽的な刺激のある場合だけとは限らない。なんとなく嬉しい時や楽しい時にも、にこにこしながら身体を揺らしているのをよく見かける。しかし本論では音楽的な刺激によって起った表現だけに限って扱うことにする。

4-1 動きの分類

観察記録やVTR録画記録の中から選びだした、音楽的な刺激に対する主な身体表現を、5つのカテゴリーに分類し一例をあげる。(座位以降の表現を扱う。)

(1)身体を上下に揺らす・膝の屈伸 <事例1>

・CDデッキから聞こえてくる子どもの歌に合わせて立位で膝を屈伸させる。(Y男児14ヶ月)

(2)身体や頭を前後に揺らす <事例2>

・膝立ちの時、保育者の歌が聞こえてくると、前後に上体を大きく揺らし前に飛び出しそうなほどであった。(Y男児11ヶ月)

(3)身体を左右に揺らす <事例3>

・保育者の歌に身体を左右に揺らして満面の笑みを浮かべる。正座していたので、左右に思いっきりたくさん揺れても倒れないように、手を床についてバランスをとっていた。(S男児17ヶ月)

(4)その場で足踏みをする <事例4>

・保育者の歌にばたばたと足踏みして、にこにこしている。これは前後や左右に揺れる以外の初めての表現なので驚いたが、後日NHKテレビ「お母さんといっしょ」の中の体操の模倣と判明した。(S男児17ヶ月)

(5)その場でくるくる回る <事例5>

・片足を軸にしてくるくる5~6回もまわる。目がまわって転ぶと声をたてて笑った。(Y男児15ヶ月)

(6)その他の表現 <事例6>

・「エリーゼの為に」のピアノ曲のCDの音が聞こえてきたら、うつ伏せに寝そべて両手を頬の下に重ねて寝るポーズをとった。おむつを替える台の上で替えている時にもう一度曲が流れると、狭い台の上にもかかわらず、上向き状態から横向きに寝返って両手を頬の下に重ねた。(N女児18ヶ月)

4-2 考察

以上のさまざまな身体の動きは、一緒にうたいたいが、まだうたえない子どもたちの精一杯の音楽表現で

ある。子どもは、ある日突然にうたい出すのではなく、歌を聞き、リズムを感じる「溜込みの時期」があるだろうと予想していた。しかし、これほど個性豊かに全身を使ってその準備をしていたとは、驚きであった。

子どもは、うたう保育者をじっと見ている事が多いので、例えば、左右に身体を揺らしながらうたっているのを見ながら、模倣して揺れている場合もあるだろう。しかしながらその動きを見ていると、子どもの中から生まれた自然な表現であるとしか解釈できない場面の方が多い。

獲得できた表現の発生順序は、立位がとれる以降に限った場合、次の順序性がみられた。初めのころは上下屈伸が多く見られ、その後前後に頭や身体を揺らす様子、続いて左右に揺れる動きが現れた。

事例2のような座位による大きな動きは、立てるようになる1ヶ月前にT児とY児に観察された。

5番目のカテゴリーの回る様子は、揺れる動きとはいささか異なるが、観察児5人が、歩行開始後の1ヶ月から6ヶ月の間に、それぞれの形で回りはじめた。何かのきっかけで回り始め、回り始めると今度は、回ることが楽しくて仕方ないような様子であった。

事例6は感受性の人一倍強いN児が全身でリラックスしたいとの表現をしたのだと考えられる。

5. 動きのリズム性

胎児のころから始まる足蹴りの動きを始めとして乳児の動きにはリズムがある。この理由を梅本は「幼児の反応は必ず数回、それも同じパターンで反復して起こるからそこにリズムを感じるのだ」と述べている(2)。

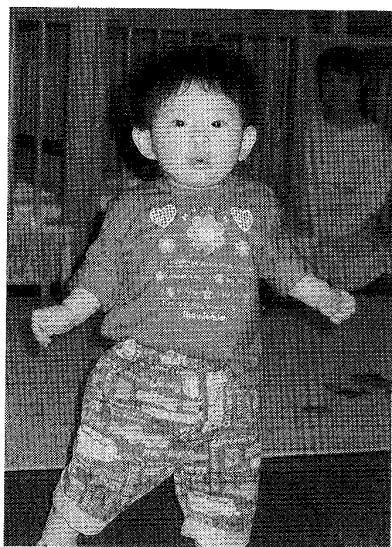


写真1 歌に合わせて左右に揺れるN女児12ヶ月

事例1では、保育者のうたう歌のテンポと身体の揺れのテンポがぴったり合っている。これは、Y児が自分の固有のテンポに、外界からの刺激(歌のテンポ)を、同期させようとしたから合ったのであり、驚くべき能力であるといえよう。

この事例の場合、膝の屈伸から次の屈伸までの時間間隔を自由に変化させる事ができるから同期できたのである。拍を刻み、テンポを合わせることは同期の基本的な能力である。

音楽心理学の分野等ではさまざまな同期反応の実験が行われている。実験室での実験結果よりも月齢の低い乳児が同期を行えることが今回確認できた。これは、日々の生活の場において信頼関係のある保育者との間で、乳児側に「一緒にうたいたい。合わせたい。」という欲求があるからこそできたことといえよう。

6. おわりに

まだことばを充分に獲得できていない乳児たちが好きな音楽や歌の刺激に対し、満面の笑みをたたえて全身を揺らしてその楽しさを表現している。これはまさに音楽の持つ根源的な力によるものである。子どもの心の動きに与える音楽の影響力の大きさを、この小さな笑顔を見ていると強く感じる。

本論で取り上げた乳児の動きは、正高のいう「手足の運動は音声言語発声の基礎となるパターン習得の道具である。(3)」のとは違い、純粹に乳児の喜びや楽しさの現れであると考えられる。

また音楽知覚の研究や実験を否定するものではないが、我々は設定されたテストが出来るかどうかではなく、日常の生活の中で、どれほど音楽が子どもたちの心を育てているかを今後も見て行きたい。それが、より良い保育のあり方を探る道であると考えられるのである。

本研究により、乳児がまだうたい出す前の幼い頃から、音楽の楽しさを全身で受け止め、表現していることがわかった。14ヶ月で既に保育者のうたう歌のテンポに合わせて揺れ、同期していることも確認できた。

音楽的な刺激に対する動きの表現は「リズムカルに動く」などの一言では片付けられない程、様々な動きがそれぞれの発達に即して観察できた。今後は動きの獲得の順序性が一般的にあてはまるかどうかについてさらに事例を多く観察していきたい。

注(1)細田淳子「ことばの獲得初期における音楽表現」

東京家政大学研究紀要 第41集2001及び第42集2002

(2)梅本堯夫「子どもと音楽」東京大学出版会1999

(3)正高信男「子どもはことばをからだで覚える」中公新書2001